

序

研究は、現在未知のことを知り、できないことを可能にするために行なうものである。したがって、企業が研究所を抱えているのは、それが将来生きて行くために、将来起り得べきことに対応するためであるということは一般に異論のないところである。

将来のことといえば、現在の技術の改良であり、新しい技術の開発である。研究所がそういうものであるとするなら、研究所は日常現場で行なわれている技術活動に対しては、あまり役立たない所ということになる。

それでよいという考えもあろう。しかし、現実の研究所はそういうものではない。本報を見ても分るように、現在行なわれている技術の中に、探求すべき事項が非常に沢山あり、また既に明らかにされている技術内容に関するコンサルタント的業務も研究所のマン・アワーを相当に食っているのが実情である。

このように研究所は、現在から将来にわたる技術に対応するものであるが、その時間軸のどこに重点を置くかということは一極めて難しい問題で、これは研究所ないし企業の戦略に属することである。それは今後、技術が対応すべき諸条件の変化速度をどう見積るかにかかっていると思われるが、そのこと自体重要な研究課題である。

こうしたことは一般論として以前からいわれているが、とくにそれが切実に感じられる昨今である。

1974年10月

清水建設株式会社研究所長

工学博士 烏田 専 右